



学びあう集団への期待

新潟大学大学院教育実践学研究科長 高木幸子

現在大学は、第4期期間(令和4年度から6年間)にあり、地域の特徴や大学の強みを生かした取組や改革が求められています。教員養成・教員育成を担う教職大学院でも第4期目標に則って取り組んでいます。目標や計画は大学院入学から修了の2年間の全体に係る内容を中心に設定していますが、その内容は院生の皆さんの修了後の進展についても視野に含んだものです。

令和6年度は5年に一度義務付けられている認証評価という外部評価を受審する年度になっており、前回(平成30年度)からの取り組みの成果や発展、改善の取組を整理して準備を進めています。この評価は、教員はもとより現職教員院生、学部新卒院生、修了生、院生の所属する学校長、所管する新潟県・新潟市教育委員会など、多くの皆様のご協力を得て行われるものです。関係の皆様には、この場をお借りして改めて深く感謝を申し上げます。

平成28年に創設した教職大学院は、令和4年度末までに112人の修了生を送り出してきました。修了後の様子を詳しく伺う機会はそう多くありませんが、それぞれの場所で、自分の仕事や生活を充実していらっしゃるかと想像を膨らませています。

今年度も後半に入りました。授業実践真っ只中の方、校内研修や学校と地域の連携に向けて奔走中の方、成果執筆中の方もいることでしょう。2年間で濃厚な学びの時間として過ごし自身の強みと課題を理解するとともに、修了後も広がっていく豊かな人間関係を構築していくことを期待しています。



教職大学院の授業紹介

必修科目

第6領域「特別支援教育」 「通常の学級における特別支援教育(特)・(監)」

担当教員 長澤正樹・野住明美・佐藤大介

この授業の目標は、通常の学級を中心に、特別支援教育の理論と実践を学ぶことです。その内容は大きく4つに分けられます。

1. 制度、学校・学級経営、今後に向けての課題

特別支援教育の理念と推進のための学校経営や学級経営のあり方について解説します。障害のあるなしにかかわらず共通する対応から、段階的に特別な対応を保障する3層モデルなど、インクルーシブ教育で採用されているシステムを紹介します。

2. 障害理解

発達障害だけではなく、不安障害や起立性調節障害など、様々な特性を解説します。障害特性を覚えることより、子どもに必要な教育的支援について、対話を通して見つめることの大切さを強調しています。

3. 授業と指導法

1で述べた共通する対応として学習のユニバーサルデザインを紹介し、実際に指導案作成と模擬授業を実施します。2の障害理解と関連し、自己理解を深めるための個別計画を作成します。さらに、特別な対応の一つとして、応用行動分析による問題行動への対応について、グループワークで深めます。

4. 学校との連携と実際

特別支援教育は学校だけではなく様々な連携の本推進します。そこで、ゲストティーチャーとして発達障害を専門とする小児科医師、防災教育では気象台情報官などをお招きしています。さらに、特別支援学校や通級指導教室を見学、もしくは担当者から直接話を伺います。

このように、単に理論を学ぶのではなく、学んだ理論に基づく実践的な指導法を身につけ、学校での特別支援教育推進役となれるよう、我々教師が修了後も支えていきます。

授業風景



「国際交流～北京師範大学教授の講義」



「課題についての発表会」

選択

特別支援教育における教科指導の理論と実践

担当教員 入山満恵子・佐藤大介

現行の特別支援学校学習指導要領では、小・中学校等に準じた改訂や、インクルーシブ教育システムの構築に向けた小・中学校等の教育課程との連続性を重視した改訂がされました。新しい時代の中で、障害のある子どもにも、その他の学習上又は生活上の困難のある子どもにも、更にはすべての子どもにとっても、良い効果をもたらすことができる指導支援の工夫が求められています。

本講義は、特別支援教育分野の選択科目として隔週金曜日の1限・2限、計8日で開講しています。「教科指導」は「読み書き計算の反復・練習」に頼りがちですが、従来の方法で効果が出ない場合があります。常に指導する側が「指導内容が子どもにとっていかなる意味を持つか？」を自問し、理論に基づき個に応じた教科指導を構築する必要があります。本講義では、その理論の根幹となる言語発達や客観的な評価法について学び、受講者がそれぞれの対象や場で効果的な教科指導の実践を追究します。

言語発達には「生理学的基盤」「社会的相互交渉の基盤」「認知的基盤」の3つの基盤が必要であること、言語発達は「基礎的認知領域」「語彙(理解・表出)」「文構造(理解・表出)」「語操作・談話(理解・表出)」「読み・書き」の5つの段階を経ること等の理論を学びます。子どもの学びを支える言語の発達は、どのような要素や経験をもとに、どのような段階を経て進むのかを理解した上で、受講者が自身の教科指導を振り返り、新たな実践を構想・実施します。Aさん(特別支援学校)は、自身が実施してきた「合わせた指導」には教科指導上のどのような目的があり、そのためにどのような授業を行なってきたかを整理し、その関係を明らかにしました。Bさん(小学校)は、通常の学級の国語科の授業を特別支援教育の視点から改善し、授業記録映像を用いた振り返りから、より多くの子どもにとって「よく分かる授業の秘密」を整理し、明らかにしました。Cさん(中学校)は、通常の学級の英語科の授業において、分かりやすい授業にはどのような工夫がされているのかを、特別支援教育の視点から整理し、自身の実践案を構想しました。

受講者は、担当教員の実務経験を踏まえた「言語発達」「特別支援教育」の理論と実際を学び、校種や教科を越えて「教科指導」についての実践を持ち寄り議論することで、多くの子どもに対し、より効果的な指導支援について考えを深めています。



「フィールドワーク～公共施設研修～」



「テーマについて議論」



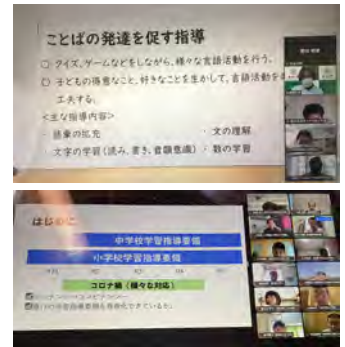
「院生による授業実践と参観」

教育フォーラム

「にいがた教育フォーラム2023inAugust」

野住明美

8月5日(土)、「コロナ後の新しい教育実践の構築に向けて」のテーマで、今年度のフォーラムを開催しました。第一部は本学教員が主催した11のワークショップ、第二部は10名の院生によるラウンドテーブル形式の研究発表と検討でした。今年度より新潟市は本フォーラムへの参加が「中堅研修及び第3ステージ研修講座の対象」、新潟県も「自主研修」と記入することが可能となり、ワークショップ194名、ラウンドテーブルは前後半ともに約90名の皆様が参加してくださいました。事後アンケートでは、99.1%の方が「非常に満足」、「満足」と答えてくださいました。個別の感想でも「遠方からの参加が可能で参加しやすい」などが多かった一方で、「対面が良い。ハイブリットがありがたい。他のイベントとの重なりが多い日程でもったいない。」といったご意見もありました。皆様からの貴重なご意見、ご感想は次年度開催へと生かしていきます。



ワークショップに参加して

新潟市立西幼稚園 園長 大矢晃子



「園を越えて学び合おう：新しい保育研修のかたち」 このテーマに惹かれ、ワークショップに初めて参加しました。今、国が推進している、幼児期の教育を小学校教育につなぐ、架け橋プログラムに取り組む中で、多くの園が試行錯誤しています。学びの連続性を目指した連携には、子どもが経験を通した学びの「何を」「どうつないでいくか」といった具体的な視点をもった取り組みが大切です。しかし、実際、幼児期の教育(保育)施設は、幼稚園、保育園、こども園などがあり、設置主体や各園の特性から、教育内容や方針にも違いがあります。そのため、幼小連携も十分進んでいるとは言えません。この課題を乗り越えるためには、新しい取り組み方が必要だと考えます。

今回は受講者が各園種の他に行政、大学、小学校と多方面から集う、今までにない新たな視点をもった研修です。その中で、2つの話題提供がありました。1つは、聖籠町の幼児教育アドバイザーが推進している研修です。アドバイザーの方は地域全体

のセンターの役割を担い、計画的に位置づけた研修を進めています。2つ目は、新潟大学附属幼稚園の「遊びのとびら」の取り組みです。園は行政と連携し、計画的にオンライン研修を行っています。動画視聴から具体的な子どもの姿をグループで語り合うことで、子ども観、保育観が更新され、質の高い教育を目指しているとのことでした。

これらの好事例をもとに、受講者がブレイクアウトルームで語り合い、新たなつながりもできました。また、東京家政大学教授の野口隆子様のご指導では、これから私たちが取り組んでいく研修の視点を明らかにしていただきました。この研修を通し、従来のやり方に止まることなく、子どもの学びをつなぐために、できることから取り組んでまいります。

最後になりましたが、園を越えた「語り合い」の場で新しい研修の在り方を示してくださった、新潟大学教授 中島伸子様 に感謝申し上げます。

教育フォーラム2023ラウンドテーブルを振り返って

M1現職 新潟市立亀田東小学校 本間伸吾



教育フォーラム第2部で行われたラウンドテーブルでは、院生主体の運営のもと、前後半併せて10グループに分かれての発表が行われました。ラウンドテーブルのねらいを「課題研究に関する発表をすることを通して、その時点での研究の目的、方法、進捗を明らかにすると共に、参加者から意見を得て、今後の見通しを考える機会とする。」として、各院生が発表・運営に臨みました。

発表は2年次院生(ストレートマスターも含む)が行い、発表のコーディネーター・サポーターは、2年次院生ストレートマスターや1年次院生が担当する形で運営しました。発表を迎えるまでに「発表のねらい・話し合いの視点の確認」「時間の使い方」「発表資料における検討」などについて院生同士で意見を交換しながら、よりよい発表になるように準備を進めてきました。私自身は、担当教員や院生と検討を重ねながら、当日の進

め方や参加方法、院生同士の役割分担など、院生全員に向けて明確な運営方法が伝わるように尽力しました。全体を動かすことの大変さと責任感の重さを学ぶことができました。

当日は、教職大学院関係者だけでなく、学校関係者(幼・小・中・高)、行政関係者、県外参加者など幅広い分野の参加者から、多面的・多角的な視点からご意見・ご指導をいただくことができ、学びの多い時間となりました。今回の学びが、各院生にとって、今後の課題研究の新たな視点となり、より一層、理論と実践の往還を図りながら行う教職大学院の学びの発展につながることをと思っています。

院生一人一人が今回のラウンドテーブルで「学んだ価値」を自覚し、今後の課題研究につなげていく前向きな姿が見られることを期待しています。

研究紹介

体育授業における主観と客観の融合による運動学習を目指して

大庭昌昭



私は「身体知」に関する研究を進めています。若い頃は、運動するヒトの身体を客観的に観察・把握することを目指し、画像動作分析やシミュレーション等が主な内容でした。その後、グレーディング能力(私は、主観的な努力度による泳速度調整・調節能力)に着目し、運動するヒトの巧みさに目を向けました。ヒトの持つカンやコツなどの身体知が、とても暗黙的な要素を含んでいることを再認識するようになりました。

スポーツ選手同様、子どもや運動が苦手なヒトなどわざを獲得する段階において、自身の主観を組み込んだ学習を進めるべきと考え、体育授業での活用を目指しています。特に「からだメタ認知(諏訪正樹：慶應義塾大学教授)」というメソッドを大切にしています。この方法は、運動者が身体で感じている「ものごと」に自覚的に目を向け言語化するよう努め、ことばに紐づけておくよう心がけること等、を特に重視しています。主観は、一般的な科学(科学的な営みには客観性が必要とされる)では

取り扱い難しい内容ですが、身体知の解明には不可欠な要素と強く感じ、可能な限り学習者自身の「主観」を言語化するための手立てを工夫しています。

実践例としては、苦しさを主観的に判断するスケール(呼吸メーター)を取り入れたOPPシートを活用しています。毎時間、呼吸メーターが変化した理由を問いかける学習カードとなっています。比較的認識しやすい「苦しさ」の程度を基に、「自身のからだ(感覚)に目をむけること」が、運動学習を進める上で重要な要素と感じています。泳ぎが苦手なヒトの方が苦しさを感じていること、泳ぎが上達すると苦しさが軽減されること、を踏まえて、「らくに」を学習課題の中心に据えた水泳授業プログラムを構想しています。

コロナ禍で急速に使用が進んだICT機器の活用(映像など客観的な資料)との両輪で、「水泳嫌い」の撲滅を目指しています。

「ひと・もの・こと」との出あいのプロデュース

新潟大学教職大学院 令和4年度修了生 柏崎市立鯖石小学校 教頭 松井陽一



急速な社会の変化は、私たちにスピード感を与える一方、「待つこと」を奪っている気がします。教育現場も同様で、保護者や地域が先生の成長を見守る文化は廃れつつあります。ICTの導入で環境も指導の在り方も大きく変わりました。だからこそ、「人材育成」が学校の喫緊の課題となっていると感じます。

私は、教職大学院で人材育成の視点を基に、質の高いチームをつくり上げる学年主任のマネジメントについて研究を進めてきました。その中で、人材育成に大きく関わる「4つの状況」が見えてきました。今、小規模校の教頭としてどのような人材育成を行っているのかを、これら「4つの状況」と重ねながら振り返ってみます。

1. 学級経営の充実

ポイントは担任としての幸福感。担任への助言や指導、価値付けとともに、担任のよさや人柄を子供、保護者、地域にアピールしています。「君たちの先生、素敵だね!」「ウチの職員、素敵でしょ?」って。

2. 先輩教師との出会い

元々職員同士仲のよい職場。私も率先して自己開示をし、話を聞いて関係性の構築に努めています。職員のニーズに合わせて知り合いを紹介することも。大学院で得た人脈が非常に役立っています。

3. 全校行事に関わる全児童生徒・職員を動かす 主任・リーダー経験

小規模校ゆえに各自が全校を動かさざるを得ない状況。モチベートして、「OK!お願いします!」と笑顔でGoサイン。細かい調整や校長への報告は私の仕事、というスタンス。

4. 自身の学年(学級)マネジメントの自覚

そのための場やツールが、日々の職員連絡会での教頭指導だったり、教頭だよりだったり。自分が職員に語る場をもつようにしています。

全ては、各自の力量形成につながるであろう「ひと・もの・こと」との出あいのプロデュースをすること。目まぐるしい毎日のスピードで進む中で「待つこと」をとおして人を育てる姿勢。自分を含めた管理職・主任層の役割だと思っています。

「これから重要なのは、学歴ではなく学習歴」。教職大学院でお世話になった遠藤英和先生のお言葉です。教職大学院での学習歴は私の財産です。新潟大学教職大学院に興味がある方へ。「出あいのプロデューサー」として、自信をもってお勧めします。



COVID-19対応も5類に移行したことで、従来の活動が可能になってきました。この数年の間に、社会も大きく変化しました。生成AIの話題が象徴していますが、この先、学校教育を取り巻く環境も含め、時代が加速的に動き出すことが予想されます。皆さんと一緒に、この変化の中、子どもが未来を創造する人となるための教育の在り方について考えていきたいと思っています。

今年度もレイアウト・デザインを委託先の(株)Shitamichi HDに勤務する本学大学院修了生 川口かおりさんがご担当くださいました。(文責 酒井悟)

新潟大学教職大学院 News Letter「協創」 第13号 2023.10.25 発行 編集・発行 新潟大学大学院教育実践学研究所(教職大学院)広報委員会
〒950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐二の町8050 問い合わせ先・kyouyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp
ホームページ URL:https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/ ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。
https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/

